

研究論文

# パフォーマティヴィティを援用する 男性／男性性研究の考察 ——理論から展望へ

小口藍子

## 要旨

本稿の問題意識は、男性／男性性研究において男性性概念を男性の実践や特性、アイデンティティとして措定することが、男性カテゴリーを自明視する作用をもたらすという点にある。そこで本稿は、本研究分野において中心的な存在であり続けるレイウイン・コンネルの男性性理論を上記の点から批判的に検討し、男性性理論にジュディス・バトラーのパフォーマティヴィティ概念を援用することが有効であることを論じる。パフォーマティヴィティ概念は、男性という一貫したジェンダーは主体内部に存在せず、男性性の反復行為によって達成されようとするプロセスであることを明らかにする。さらにその反復行為は常に失敗し得るものであり、別の再意味付けの可能性を持つ。つまり男性、男性性とは固定的なカテゴリーではなく、常に失敗に開かれた流動的なものである。しかしコンネルの分析では、男性性はあくまで男性たちによる集団的な実践として扱われる。男性たちの実践を何らかの男性性であるとして、コンネルは自ら実践を男性性／女性性の二元的なジェンダー関係に配置してしまう。さらに集団的な実践としての男性性は、常にその担い手である男性というカテゴリーを先立って措定するものである。実践はすでになされたものと認識され、パフォーマティブな男性性の反復行為が不完全かつ達成不可能であるということは看過される。男性性を複数化しつつも固定的に捉えるコンネルの理論枠組みは、どこまでも男性というカテゴリーをあらかじめ固定的に認識する。こうした理論的限界を克服するために、パフォーマティヴィティ概念を援用した男性性理論を展開し、男性・男性性を流動的なものとして捉え直すことが有効だと結論づけられる。最後に本稿は日本社会を対象とする男性／男性性研究を焦点に当て、パフォーマティヴィティを援用

する研究の展望を論じる。

#### キーワード：

男性、男性性、レイウイン・コンネル、ジュディス・バトラー、パフォーマティヴィティ

## 1 はじめに

本稿の問題意識は、男性／男性性研究（men and masculinity studies）において、男性性概念を男性の実践や特性、アイデンティティとして捉えることが、固定的な男性カテゴリーを自明視するのではないかという点にある。

男性／男性性研究は第二波フェミニズムを受けて誕生し、欧米圏を中心に着手された研究分野である。本研究分野で最も依拠されるのは、オーストラリアの社会学者Raewyn Connellの男性性理論である。1995年に初版が刊行された*Masculinities*は世界的に大きな影響を与え、Connell理論は本研究分野の中心的存在であり続けている。

他方でConnell理論の存在の大きさは、本研究分野がConnell以降の理論的進展に乏しいことを意味するといえよう。実際に、Connell理論を中心に据える既存の男性／男性性研究の理論的視座は、フェミニズム理論の立場から繰り返し批判を受けている。その主要な批判点は、男性／男性性研究がポスト構造主義フェミニズムの枠組みと距離を取るがゆえに、ジェンダーアイデンティティを前景化した議論に陥っていることである（Beasley, 2012; 2015）。

しかしこうした理論的乖離は、ポスト構造主義フェミニズムが男性性理論にとって無益であることを意味するわけではない。むしろポスト構造主義フェミニズムの枠組み、特にJudith Butlerのジェンダー・パフォーマティヴィティの議論は、男性／男性性の理論において重要な知見をもたらすと筆者は考える。

パフォーマティヴィティ概念は、ジェンダーアイデンティティが主体内部にあらかじめ存在するのではなく、パフォーマティヴな反復行為によって構築されようとするものであることを明らかにした。これが示唆するのは、男性性とは男性の内部に先立って存在するものでも、男性というカテゴリーを確実に成立させる

ものでもないということだ。男性性とは主体化のプロセスにおいて不完全ながら引用されるものである。その意味で「男性性」「男性」とは、決して固定的なカテゴリーではないはずだ。

他方でConnell理論をはじめとする既存の男性／男性性研究は、男性性を男性の実践（の配置）や特性、アイデンティティ意識、あるいは実際の男性の在り方として捉える傾向がある。パフォーマティヴィティの議論を踏まえるところとした理論枠組みは、男性性、そしてそれに紐づく男性カテゴリーを固定的なものとして自明視しているといえるのではないか。しかしながら、ジェンダー・パフォーマティヴィティの観点から男性性理論を批判的に検討する作業は、これまで積極的に行われてこなかった。

これを踏まえ本稿の目的を、Connell理論を批判的に検討し、パフォーマティヴィティ概念を援用する男性性理論の展望を提示することに定める。はじめにConnellの男性性理論が固定的な男性カテゴリーの自明視に帰結することを指摘し、男性性理論にパフォーマティヴィティを援用することが今日においても有効であることを論じる。次に筆者のフィールドである日本社会を対象にした男性／男性性研究に議論の焦点を絞り、パフォーマティヴィティを援用する男性性理論の具体的な展望を明らかにする。

## 2 男性性理論とパフォーマティヴィティ概念との関係

### 2-1 Connell理論の立ち位置

Connell理論の検討に入る前に、本章ではその理論的な立ち位置を確認する。フェミニズムに呼応して誕生した男性／男性性研究の理論は、フェミニズム理論から多くの影響を受ける。

Connell理論の枠組みもフェミニズム理論を大きく反映する。1980年代後半頃から展開されたConnell理論には、ポスト構造主義フェミニズムに基づくクイア理論も反映されるものの、その基盤には、家父長制支配を問題視した第二波ラディカル・フェミニズムや物質的不平等を重視するマルクス主義フェミニズムが強く意識されている（小口, 2023, p. 138-9）。Connellは一貫してポスト構造主義に対して懐疑的な態度を取る。*Masculinities* 第二版の序文では、ポストモダニズムの言説分析では経済的不平等などを捉えることができないという懸念を表

す (Connell, 2005, p. xix)。自身の理論への批判に応答したMesserschmidtとの共著論文でも、ジェンダー関係は非言説的な活動を通して構成されると主張する (Connell & Messerschmidt, 2005, p. 842)。このような立場から展開されるConnell理論はポスト構造主義フェミニズムの知見と距離を取るものであった。必然的に、Connell理論を中核的な存在とする男性／男性性研究分野全体がポスト構造主義フェミニズムと距離を置きがちになる。この理論的乖離は、Beasley (2012; 2015; 2023) が繰り返し指摘する通りである。

しかしながら、これはポスト構造主義フェミニズムが男性／男性性の議論にとって無益だということの意味するのではない。むしろポスト構造主義フェミニズムの理論枠組みは、本研究分野に重要な示唆をもたらすと考える。それどころか、それは本研究分野が採る理論的な前提について、根本的な再考を促すものだといえる。ポスト構造主義フェミニズムの理論において最も大きな影響を持つもののひとつはJudith Butlerによるジェンダー・パフォーマティヴィティの議論である。2-2では、Butlerのジェンダー・パフォーマティヴィティが男性性理論にもたらす重要な論点を明らかにする。

## 2-2 パフォーマティヴィティ概念が男性性理論にもたらすもの

Butler (1990/2018) が『ジェンダー・トラブル』で明らかにしたのは、ジェンダーアイデンティティが予め安定したものとして自己の内側に存在するのではない、ということだ。むしろそれは、常にパフォーマティヴな実践の反復・引用によって外的空間へ生み出されるものである。首尾一貫したジェンダーアイデンティティとは幻想にすぎないと、Butlerは看破する。ジェンダーアイデンティティという幻想は、身体的な意味付けを通じて産出される。その意味でジェンダーは、常にパフォーマティヴなものである。

さらにButlerは、反復によって作り出されるジェンダーが、常にトラブルに開かれていることを論じる。ジェンダー化された永続的な自己とは反復行為によって構造化されたものであることが判明するが、他方でその反復行為は、ときおり起こる不整合のために、この「基盤」が暫定的で偶発的な〈基盤ナシ〉であることも明らかにするのである (Butler, 1990/2018, pp. 247-248, 強調原文)。「起源なき模倣」 (Butler, 1990/2018, pp. 243) であるジェンダーのパフォーマティヴな実

践は、常に別の再意味付け（resignification）の可能性を内包する。つまり、パフォーマティヴな反復行為を通じたジェンダーアイデンティティへの自己同一化は、常に失敗の可能性に開かれているのだ。

このようなジェンダー・パフォーマティヴィティの議論は、男性／男性性研究の観点において下記のように理解できるだろう。男性というアイデンティティは、あらかじめ自明のものとして主体の内部に存在するものではない。ゆえにジェンダーカテゴリーとしての男性は、すでに成立済みの存在ではない。むしろそれは、不断の反復行為によって達成されようとするものなのだ。

さらにパフォーマティヴィティ概念は、男性性概念についても重要な認識の転換をもたらす。男性／男性性研究分野において、男性性は男性の実践や男性の特性、あるいは男性のアイデンティティとして主に理解されてきた。しかしパフォーマティヴィティ概念が暴き出すのは、男性性とは、男性の特性や実践であれアイデンティティであれ、決してすでに確立されたものではないという点である。男性性は先立って存在するのではなく、男性としての同一化が試みられる際に反復され引用される。そしてそれは、決して完全なものではあり得ない。男性性の反復実践、そしてそれを通じた男性アイデンティティへの同一化は、常に別の再意味付けへと開かれている。

パフォーマティヴィティ概念は、このようにして男性と男性性が決して達成されないプロセスであることを明らかにする。ここで突きつけられるのは、「男性」や「男性性」というカテゴリーを所与のものとするような認識への根本的な疑義である。男性性とは、男性の内部にあらかじめ存在するアイデンティティでもなければ、男性によって完璧に実践されるものでもない。Howson & Hearn (2020, p. 49) が指摘するように、男性性とは未達成なもの（has not been achieved）というより、常に達成不可能（unachievable）なのだ。そして、達成不可能な男性性の引用の繰り返しを通して試みられる男性への同一化もまた、達成不可能なものである。

前節では、ポスト構造主義フェミニズムの枠組みがConnell理論では積極的に採用されてこなかったことを確認した。次の3章ではConnell理論を批判的に検討し、ジェンダー・パフォーマティヴィティの観点を踏まえてもなお、本理論が有用だといえるかを検討する。言い換えれば、パフォーマティヴィティ概念なし

に男性／男性性を理論化することの妥当性を検証していく。

### 3 Connell理論の批判的検討

#### 3-1 男性性の理論

本章では*Masculinities* 第二版の議論を中心に、Connell理論を検討する。本稿の問題意識に従い、ここではConnell理論を「男性性」と「男性」カテゴリーの2点から批判的に検討する。

*Masculinities*は三部から構成される。第一部では本書の理論的視座が示される。続く第二部では実証的な分析が行われる。最後の第三部では男性性の歴史的分析を経て、政治的な実践の方向性が明らかにされる。まず本節3-1では、第一部で男性性がどのように理論化されているかを検討する。

第一部ではこれまでの男性性の分析方法が精神分析と性役割理論の2点から批判的に検討され、社会学的な視点の必要性が主張される。男性性を理解するうえでの精神分析の価値は、パーソナリティの構築や欲望の複雑性と同時に、矛盾を孕みながら動的に構築される社会的関係をも把握できるかにかかると、社会科学が必要である (Connell, 2005, pp. 20-21)。一方で性役割理論は概して論理的に曖昧で、権力に関する問題を把握することに根本的な課題を抱えている (Connell, 2005, pp. 26-27)。ジェンダーの近代社会学で重要なのは、ジェンダーは社会的な相互作用に先立って固定されているのではなく、相互作用において構築されるということである (Connell, 2005, p. 35)。ここでConnellは、ジェンダーが社会的な実践を通して構築される様に着目する。

さらにConnellは、ジェンダーとは生物学的性差、社会的に構築される性差、あるいはその双方、のいずれでもないとする (Connell, 2005, p. 45-46)。自然な性差が存在するという生物学的決定論は完全にフィクションの領域である一方で、身体を文化的な意味が書き込まれる対象として捉えるアプローチは身体そのものの存在を軽視する (Connell, 2005, pp. 46-51)。さらに両者の混合もまた適切ではない。それは生物学的性差をより重視し前提とする議論に陥り、社会的なプロセスが二元的な性差を様々な操作する側面は見落とされる (Connell, 2005, p. 52)。

そこで男性性を理論化するためにConnellが着目するのは、身体と実践の議論

である。そこでは「身体－再帰的な実践 (body-reflexive practice)」概念が提唱される。こうした身体と実践への着目が、Connellの男性性理論の展開のうえて重要な鍵となっている。

Connellは、ジェンダーの文化的な解釈の中心となるのは男／女であることの身体的な感覚であるとした (Connell, 2005, p. 52)。ジェンダーの社会的な関係は、身体的なパフォーマンスにおいて知覚され象徴される (Connell, 2005, p. 54)。身体は対象 (objects) と実践の行為主体 (agents of practice) の双方であり、身体が承認され定義されることで実践が構造を形成する (Connell, 2005, p. 61)。身体－再帰的な実践とは、身体と社会的関係との相互関係のパターンである。Connellはジェンダーを、身体－再帰的な実践を通じて構築される社会的なプロセスであるとする。

ゆえにConnellはこれまで男性性の理解に用いられてきた本質主義的な定義、男とは何かという実証主義的な定義、男は何をすべきかという規範的な定義、女性性でないものとする記号論的なアプローチに反論し、男性性はジェンダー関係のシステムなしに存在しないと主張する (Connell, 2005, pp. 68-71)。男性性とはジェンダー関係における場所であり、男性と女性がジェンダーの場所に携わることを通じた実践でもあり、身体的な経験やパーソナリティ、文化下の実践の効果でもある (Connell, 2005, p. 71)。男性性／女性性というとき、それはジェンダーの実践の配置 (configurations of gender practice) を名付けているのだ (Connell, 2005, p. 72)。少なくとも理論上においては、男性性とは単なる男性の実践ではない。そこで見られるのはジェンダー関係の実践の効果と場所、つまり「配置」である。

ここで押さえておく必要があるのは、Connellは「配置」としての男性性を動的なものとして捉えようとする点である。ジェンダー関係を理解するうえで重要なのは「実践を配置するプロセス (the process of configuring practice)」 (Connell, 2005, p. 72, 強調原文) である。

これを踏まえて展開されるConnellの男性性理論は、男性性を複数形として捉え、その相互関係が女性性の支配を含むジェンダー関係を構築すると論じる。男性性を複数化することで明らかになるのは男性性間の「ヘゲモニーと支

配／下位<sup>1</sup>と共謀」及び「周縁化／文化的承認」という2つの分析枠組みである (Connell, 2005, p. 81)。

Connell理論において、男性性はジェンダー関係における実践の配置である。さらに男性性は単数形ではなく複数形をとる。複数の男性性の相互関係は全体のジェンダー関係を構成する。ジェンダーとは、そうした社会的実践が男性性／女性性として秩序づけられていくプロセスである。

男性性を動的な配置のプロセスとする本理論は、何らかの男性性が男性の内部にあらかじめ存在するという認識をある程度超えようとするものであるといえよう。こうした論理展開は、本質主義や性役割理論といった、ジェンダーを固定的なカテゴリーとして扱う議論を乗り越えるために採られた。そのため第二部以降の実証分析と政治的実践の議論では、Connell理論が男性性を固定的なものとして扱わないことにどれだけ成功しているかを検討することが必要である。つまり問われるのは、身体－再帰的な実践が男性性としてジェンダー関係に配置されるプロセスを、Connellがどれほど実証的に描けているかである。

### 3-2 看過される配置のプロセス：男性性の実証分析と政治的実践

第二部ではオーストラリアの男性集団のライフヒストリーが紹介される。ここでは主に4章と5章の内容を取り上げる。

4章では、労働者階級の男性たちの語りが分析される。ここでConnellが着目するのは、労働者階級の男性たちの暴力についての語りである。仕事や仲間たちとの交流、異性愛の実践などについて語るなかで、彼らはしばしば暴力の経験に言及する。Connellは彼らの語りから、仲間同士の集まりが時に暴力沙汰に発展する様を読み取る。その多くは仲間内での男性同士の暴力であり、しばしば移民や同性愛者、女性に対する暴力も含まれる。こうした暴力は、集団的に実践されるものとして語られる。

そのためConnellは彼らの実践を分析するうえで、その集団性に着目する。男性たちの生活環境に対する反応は、個別的でありながらも集団的である

<sup>1</sup> Connell理論のsubordinationは日本語で「従属」と訳されるのが主流である (Connell, 2005/2022)。しかし平山 (2020, p. 55) は、subordinateは必ずしも「従属的」と限らず、subordinate masculinityの訳は「副次的な男性性」や「下位の男性性」の方が適切だと指摘する。これに倣い本稿ではsubordinateを「下位」と訳出する。



(Connell, 2005, p. 106)。それを踏まえ Connell は「基本的に男性性の担い手は集団である」(Connell, 2005, p. 107, 強調原文) であるとする。男性性は集団的な実践 (collective practice) として理解される。そしてこの理解は、以降の分析においても継続される。

つまり実証分析において男性性は、第一部で論じられたような「実践が配置されるプロセス」としてではなく、「男性たちによる集団的な実践」としてみなされる。ここにおいて、Connell の理論と実証の「ずれ」が読み取れる。そしてこの「ずれ」により、集団的な実践がどのようにして男性性に位置付けられ、ジェンダー関係に配置されているのかというプロセスは分析されない。

Connell は労働者階級の男性たちが語る暴力、学校への反抗、軽犯罪、ドラッグやアルコールの乱用、時折の単純労働、バイクや車、短期的な異性愛関係を「ジェンダーの実践」(Connell, 2005, p. 110) と解釈する。Connell は彼らのこうした集合的な実践を「抗議的男性性 (protest masculinity)」と名付ける。ただし抗議的男性性は、ステレオタイプ化された男性役割を単純に遵守するものではない (Connell, 2005, p. 110)。それはジェンダー平等主義的な価値観や、女性的とされるような表現の感覚とも両立可能である (Connell, 2005, p. 110)。

上記のような男性たちの集団的な実践は、ひとまとめに男性性として括られる。他方で、それを男性性と呼ぶことの必然性は説明されない。抗議的男性性が必ずしもステレオタイプの男性役割を反映せず、女性的とされるような実践とも両立できるのであれば、それらの実践を男性性と名付ける必然性があるとはいえないのではないか。もしそれでもそれらの実践が男性性として解釈されジェンダー関係に配置されるプロセスが存在すると Connell が考えるのであれば、なおのことそれが男性性として成り立つプロセスを論じる必要がある。しかし彼らの実践がどのようにして男性性に位置づけられ、ジェンダー関係を構成するのかという分析はなされない。

第一部で提示されたような「配置のプロセス」は看過され、男性性は集団的な実践を指す用語になってしまう。Connell が彼らの実践を男性性と名付ける理由は配置のプロセスにあるのではなく、単に実践の担い手が「男性たち」だということに依存している。言い換えれば「男性たち」による実践を「男性性」と自動的に名付けることで、ジェンダー関係への配置を Connell 自身が行ってしまっ

いるのである。

この問題は5章でも継続する。5章では環境運動にかかわりフェミニズムに向き合うようになった男性たちの語りが検討される。Connellは彼らの活動を「ヘゲモニックな男性性への挑戦」になると評価する (Connell, 2005, p. 127)。それらは具体的には、平等、集団性や連帯、個人の成長、自然との結びつきを重んじるような実践とイデオロギーを指す。では、こうした集合的な実践はどのように配置され、ジェンダー関係を平等化し得るのだろうか。そこでは実践が必ずしも男性性として配置されないような方向性も当然想定されるだろう。

しかしながらConnellは「男性性の消滅」(Connell, 2005, p. 134)は避けられるべきであるとする。なぜならそれは女性化を引き起こし、アイデンティティの喪失へと繋がるためである。問題なのはいまだ家父長的な社会において、脱ジェンダーの実践は進歩的だが動員解除にもなり得ることだ (Connell, 2005, p. 142)。ヘゲモニックな男性性を拒絶する男性たちには、ジェンダー化された性差別に対抗する政治が必要なようだ (Connell, 2005, p. 142)。Connellは男性たちの実践を「男性性」と自ら名付ける姿勢を崩さない。

こうした議論を踏まえ第三部では、不平等なジェンダー関係を是正するような男性性の政治的な実践が論じられる。9章でConnellは性差別に対抗する男性たちにとって「脱出の政治 (Exit Politics)」が有効であると主張する。そこでは男性性／女性性の二分法に抗うような脱ジェンダーの実践に一定の評価が付与されつつも、やはりそれは前面化されない。代わりに10章で論じられるのは、新たな男性性を再形成し再配備することの可能性である。

そこでまず焦点が当たるのは、身体－再帰的な実践である。そこでは身体の行為主体性を喪失するのではなく拡張すること、つまりこれまでと異なる男性身体の使い方や感じ方、見せ方を探求することが求められる (Connell, 2005, p. 233)。それはジェンダーの文化的な要素を消す (delete) ことではなく、組みなおす (recompose) ことを意味する (Connell, 2005, p. 234)。Connellはこうした実践を「脱ジェンダー化する戦略」(Connell, 2005, p. 232, 強調原文)と呼称する。しかし上記のように、実際には脱ジェンダー化された (degendered) 実践よりも、男性性として再ジェンダー化された (regendered) 実践に焦点が当たる。

そして「脱出の政治」に向けた「男性性の政治」において重要になるのは、男性性はジェンダー以外の社会関係に影響されながら複数の形態をとる点である。職場や組織、コミュニティや地域での社会的な闘争は必然的に異なる論理を持ち、しばしば異なる男性集団の利害の葛藤を明るみに出す (Connell, 2005, p. 238)。そしてそこに、異なる集団同士の利益を重ね合わせることによる社会正義のプロジェクトとしての連帯の政治が見いだされる (Connell, 2005, p. 238, 強調原文)。複数の男性性の間には異なる利害関係や対立が存在する。ゆえに男性性の再配置 (reconfiguration) と変化 (transformation) は新しい可能性に開かれている (Connell, 2005, p. 243)。

こうした論理展開は男性性／女性性の二元論に基づき、男性たちの実践は男性性へと回収されていく。こうした男性性の再形成と再配置は、ジェンダー関係を平等化するために必要なプロセスであるとして正当化される。そして繰り返しになるが、(再) 配置のプロセスは実証的に検討されるというより、Connell 自身によって行われる。

Connell 理論は男性性／女性性の二元論を歴史的に形成されるものであるとしながら、ある時点においては既に成立したものとみなす。そのため男性性／女性性の二元的なジェンダー関係に回収されないような実践や、そうした実践を可能にするための方法は模索されない。そこでは反復行為としての男性性が常に達成不可能であり、失敗の可能性に開かれるということは見逃され続ける。

### 3-3 集会的な実践の担い手としての「男性」

ここまでの「男性性」の検討からは、Connell が実証分析と政治的実践の議論では、男性たちによる集会的な実践を男性性と位置づけていたことが明らかになった。次に「男性」カテゴリーを検討するうえでは、第一部の実践の議論に再び着目することが有効である。Connell 理論で男性カテゴリーは身体－再帰的な実践の担い手として想定されるためである。

先述のように、実践の配置 (configuration) としての男性性は、固定的ではなく動的なプロセスである。ただし動的な側面は、あくまで配置の「プロセス」のみにおいて強調されることに注意したい。つまり実践自体は既に「なされたもの (things done)」 (Connell & Messerschmidt, 2005, p. 832) として捉えられるので

ある。実践を「なされたもの」として固定的に捉える Connell 理論は、反復的な主体化の実践を通して男性というカテゴリーが成立されようとする様を検討するものではない。むしろそれは実践の担い手としての男性カテゴリーの存在を、実践に先立つものとして想定する。

しかし2-2で検討したButlerの議論に鑑みれば、男性というカテゴリーは予め存在するものではなく、不完全な反復行為を通して成立されようとする。そしてそれは常に達成不可能なプロセスである。実践がなされる（doing）なかで男性としての主体化がなされることを看過する Connell 理論は、カテゴリーとしての男性の不完全さに無批判であったといえよう。

第二部の実証分析においても、男性というカテゴリーは自明なものとしてみなされる。先にも述べたように、分析の対象となるのは男性たちのライフヒストリーである。Connellは彼らが語る集合的な実践を、既になされたもの（things done）とみなす。そしてその実践を主に男性性と名付けていく。そこでは実践がまさになされるなかで、彼らが男性として主体化しようとする様は看過されてしまう。

Connell 理論において、男性的な実践の担い手である男性たちは、どこまでもその実践に先立つものとして想定される。Connellはジェンダーを「固定的なカテゴリーではない」（Connell, 2005, p. 37）と想定しながらも、ジェンダーの実践をなされたもの（things done）と措定する。そのため実証分析でも、結局のところ、実践の担い手としての男性カテゴリーの安定性が批判的に検討されることはなかった。Connell 理論において男性というカテゴリーは、既に成立したものとして論じられる。そしてそれが主たる男性性の担い手であるという前提は保持される。

### 3-4 Connell 理論の限界

Connellは男性性を理論的には「ジェンダー関係における実践の配置」と措定し、配置は動的なプロセスであると強調する。しかし実証分析や政治的実践の議論に移ると、男性性は「男性たちによる集合的な実践」として扱われる。そこでは、それぞれの実践がジェンダー関係に配置されるプロセスが実証的に検証されることはない。男性たちの実践は、それが現行のジェンダー関係に従うものでも

対抗するものでも、基本的に男性性として位置付けられる。つまり男性たちの実践を男性性として名付けることで、男性性／女性性の二元的なジェンダー関係への配置を Connell 自身が行ってしまっているのだ。

男性たちの実践は、彼らが過去を振り返る語りから検証される。そのため実践はなされたもの (things done) としてみなされる。そこではパフォーマティヴィティ概念が明らかにした、男性性とは固定的なものではなくパフォーマティヴな反復であるということは検討されない。

パフォーマティヴィティ概念が明らかにするのは、反復行為としての男性性はどこまでも達成不可能だということである。つまり男性性の反復がまさになされる (doing) プロセスは、それが意図せず失敗し、別の再意味付けへと開かれる可能性を持つ。しかしながら男性性をどこまでも固定的なものともみならず Connell 理論は、男性性の達成不可能性を見逃してしまう。Connell はジェンダーを予め固定されたものではないと述べてながらも (Connell, 2005, p. 35)、結局のところ固定化に陥ってしまう。

さらに既になされた実践としての男性性は、実践の担い手としての男性を実践に先立つものとして措定する。そこではパフォーマティヴな反復行為を通じて、男性が主体化していくプロセスは検討されない。男性カテゴリーは、男性性の主な担い手としてつねに先立って想定されるのである。

先に述べたように Connell 理論は歴史や社会関係の複数性に着目し、男性性を複数化する。しかしどれだけ男性性を複数化しても、それが根本的には流動的であることに切り込むものではなかった。「男性性は集合的な実践で、その担い手は男性(たち)である」という Connell 理論の視座は、男性カテゴリーをあらかじめ自明視することから逃れられない<sup>2</sup>。

<sup>2</sup> こうした視座を持つ Connell 理論は、シスジェンダー・ヘテロセクシュアルの男性性を認識の中心に据えることになる。Connell 理論がシスジェンダー・ヘテロセクシュアル中心であるという批判は、これまでもなされたという。これに対し Connell & Messerschmidt (2005, p. 837) は、本理論はあくまでヘテロセクシュアリティを問題視し、身体を自然化する議論を克服するものだと反論する。しかし本稿で論じてきたように、Connell は男性たちの集合的な実践を男性性とみなし、それを男性性／女性性の二元的なジェンダー関係に配置する。そこではヘゲモニックな男性性がゲイの男性性を下位に置くプロセス、さらにはそれが決して達成済みではないことは検討されない。さらに本理論では、実践としての男性性がいかに「ペニスのある身体」(Connell, 2005, p.231)、つまりシスジェンダー性とかかわりながら配置されるかも説明されない。上

ゆえに、フェミニズム理論の立場からConnell理論を下記のように批判するBeasleyの見解の妥当性が確認される。男性性を複数の類型や集団とするConnellの記述はモダニスト的なアイデンティティの理解に留まり、主体を超えた、そして主体の中の流動性への関心というポストモダンの思想とは質的に異なるものであった (Beasley, 2012, p. 757, 強調原文)。

本稿は、こうした問題がConnell理論での男性性の論じられ方に起因することを論じてきた。そしてこの理論的境界を乗り越えるために、男性性理論においてパフォーマティヴィティ概念を援用することが有効だといえるだろう。パフォーマティヴィティを男性性理論の枠組みに援用することで、ジェンダー・カテゴリーとしての男性や、それを成立させようとするものとしての男性性が、つねに達成不可能なものであることを論じることが初めて可能になるからだ。

次章ではこの議論を筆者のフィールドである日本社会を対象とする男性／男性性研究に引き付けて、パフォーマティヴィティを援用する男性／男性性研究の展望を論じる。

#### 4 パフォーマティヴィティを援用する男性／男性性研究の展望：

##### 日本の研究群から

##### 4-1 Connell理論への偏向：多様な男性像としての「複数の男性性」

「はじめに」で述べたように、Connell理論はグローバルに展開される男性／男性性研究において最も影響力のある理論であり続けている。日本の男性／男性性研究においてもそれは例外ではない。

Connell理論に依拠しながら日本社会の男性／男性性を検討するのは多賀 (2001) の研究である。多賀は男性たちへのライフストーリー・インタビューを通して、彼らのジェンダー形成の過程を明らかにする。

しかし多賀はConnell理論をそのまま援用するわけではない。多賀はこれまでの研究では男性たちの性規範をめぐる葛藤が不可視化されることに問題意識を持ち、男性内の多様性を明らかにする必要性を主張する (多賀, 2001, pp. 35-36)。ゆえに多賀はConnell理論のような男女間の不平等という「大きな絵」を「幅

---

記の反論が説得力を持つとはいえないだろう。

の広い筆」で描くのみならず、「細部を描く小筆」の分析枠組みが必要だとする（多賀, 2001, p. 88）。そのような前提のもと、性差別的イデオロギーと反性差別的イデオロギーが交錯する現代日本社会において、それらと葛藤したり交渉したりする「男性内の多様性」が描き出される。

多賀（2001）の研究はConnell理論に部分的に依拠しつつも、「男性内の多様性」に着目することを重視する。こうした男性（性）の多様性や複数性が日本社会の男性／男性性研究の大きな関心のひとつにあることは、渋谷（2001）も指摘する通りである。そして「男性内の多様性」への関心は、Connell理論の「複数の男性性」概念と呼応していく。

Connell理論をより前面に押し出して現代日本社会の男性性の分析を行うのは、田中（2009）の研究である。田中はConnell理論の「複数の男性性」に着目する。しかしそれは単に男性性にもさまざまな形態があると主張するためではなく、男性性の競合によってどのようなジェンダー秩序が構築されているのかを明らかにするためだとする（田中, 2009, p. 13）。田中は複数の男性性の関係をマクロに把握するものとしてConnell理論の援用を試みる。それを踏まえ、退職者の男性や「オタク」男性などの幅広い多様な男性像が分析される。

そこで男性性は「ある社会で男性と関連づけて把握される諸特性」（田中, 2009, pp. 10-11）とされる。さらに男性性は、ヘゲモニックな男性性が「フルタイム労働に従事しながら妻子を養う男性像」（田中, 2009, pp. 157-158）とされるように、実際の男性像を表す概念としても用いられる。

田中は「男性性は決して一枚岩ではなく、その内部には多様性や矛盾を内包している」（田中, 2009, p. 159）と結論づける。田中は複数の男性性（男性像）の多様性や、それらの間の矛盾を含んだ関係を分析する。しかしそれはConnell理論と同様に、パフォーマティヴな反復としての男性性そのものの達成不可能性を検討するものではない。

このように日本の男性／男性性研究において、Connell理論は「男性内の多様性」という関心とともに依拠され、特に「複数の男性性」の点から受容された。「複数の男性性」は、男性たちの多様性やその関係性を描くものとして援用される。そのため男性性概念はConnell理論で定義された「実践の配置」というより、男性の規範や特性、男性の在り方として扱われる。

こうした分析枠組みは、Connell理論と同様、Butlerのジェンダー・パフォーマンスティヴィティを反映するものではない。「複数の男性性」で「多様な男性像」を描き出すことは、あくまで男性らしさや男性像が複数であることを指摘するに留まる。「多様な男性像」やその関係性を表す概念としてConnell理論の「複数の男性性」を援用する議論は、実践や理念型としての男性性がいずれも達成不可能であること、その意味で男性カテゴリーもまた流動的で達成不可能であることを前面化するものではない。

さらには、Connell理論自体の妥当性も十分に検討されてきたとはいえない。川口（2014）はConnell理論を批判的に検討し、男性性間のヘゲモニー闘争と多元的なジェンダー構造に着目してConnell理論を援用することを提案する。しかしこの議論でも、Connell理論が男性性を「男性たちの実践」として運用することの根本的な問題は検討されない。川口はConnell理論を批判的に検討したが、それはConnell理論をいわば「延命」することに留まる。

このように、日本社会を対象とする男性／男性性研究では、特に「複数の男性性」に着目してConnell理論が受容されてきた。しかし今日に至るまで、Connell理論自体の妥当性は十分に議論されてきたとはいえない。そのためConnell理論に内在するような「男性」や「男性性」の認識の問題は、4-2で挙げる研究を除いて、殆ど検討されていない。ゆえに日本社会を対象とする男性／男性性研究においても、パフォーマンスティヴィティを援用して男性性理論を展開することには一定の有効性があるといえる。

最後に4-2では、日本社会を対象とする男性／男性性研究群において、ジェンダーのパフォーマンス的な側面に着目して展開される先行研究を検討し、今後の展望を深める。

#### 4-2 パフォーマンスティヴィティを援用する男性性理論の展望

本節では、日本社会を対象とする男性／男性性研究のうち、ジェンダーのパフォーマンス的な側面を捉えるものとして、平山（2017）の研究を検討する。それを通して、パフォーマンスティヴィティを援用する男性性理論の展望をより具体的に論じる。

平山（2017）は親の介護を担う息子たちの調査を通じて、自立・自律と結び



付けられる男性性が、息子介護を可能にする女性たちのお膳立てを「なかったこと」にすることで成り立つ側面を明らかにした。この研究はジェンダー・パフォーマティヴィティの枠組みを前面に押し出してはいないが、ジェンダーが行為遂行的な言説実践によって組み立てられるプロセスを明らかにするものだと見える。

平山によれば、男性性は、私的領域における、あるいは私的領域に対する依存を不可欠なものとしながら同時にそれを「なかったこと」にする、という欺瞞的な操作によって完成する（平山, 2017, p. 223）。この指摘は、実践や規範としての男性性が決して成立済みのものではなく、むしろ他者との交渉のなかで成り立とうとするプロセスであることを示唆する。

平山は彼らが「息子＝男性である自分が親を介護すること」をどのように説明可能にするかを分析する。そこで明らかにされるのは、その説明が「介護は女性のごとである」という伝統的で規範的な言説を解体することによってだけでなく、むしろ「介護は身体的にタフな男性の方が向いている」などといった伝統的な性別分業を維持する言説を用いても行われることである。平山はButlerの議論にも依拠しながら、こうした息子介護者たちの語りが編み出した論理は性別分業へ抵抗するための言説資源となり得ると指摘する（平山, 2017, p. 150）。

平山の研究は、ジェンダー規範の解釈が言説によってパフォーマティヴに構築されること、さらにその言説はときに矛盾含みで組み立てられることを明らかにする。そこでは、ジェンダー規範の説明実践が決して一貫したものではないことが提示される。他方でこれは、息子性や男性性とされるジェンダー規範の「欺瞞」を指摘することに留まり、その失敗の様相を詳らかにするものではない。つまり本研究は、男性性の説明実践が達成不可能であることを提示するものの、それがどのようにして別の再意味付けに開かれているかを積極的に検討するものではない。

Butlerが指摘するように、ジェンダーの「反復行為は、ときおり起こる不整合のために、この『基盤』が暫定的で偶発的な〈基盤ナシ〉であることも明らかにするのである」（Butler, 1990/2018, pp. 247-248, 強調原文）。パフォーマティヴィティを援用する男性性理論を打ち立てるにあたっては、男性性が〈基盤ナシ〉であることだけでなく、「不整合」としての「再意味付け」が、現にどのように

生まれているかを詳細に検討することも必要だろう。常に言説／物質的に存在するものの棄却されようとする「再意味付け」の存在を詳らかにすることは、より豊かな「男性優位を前提としない対抗言説」(平山, 2017, p. 151)を集めることを可能にするだろう。

その意味で「再意味付け」への着目は、Connellが男性たちを「動員解除させ得る」(Connell, 2005, p. 142)として棄却したような、男性たちの実践を男性性／女性性の二分法に帰結させずに物質的な不平等を是正する政治的な取り組みでもある。それはまさに「どんなパフォーマンスが、そこで、男性性と女性性の場所やそれらの安定性についての再考を促すのか」(Butler, 1990/2018, p. 244, 強調原文)を検討することである。

## 5 おわりに

本稿の問題意識は、男性／男性性研究において、男性性を男性の実践や特性、アイデンティティと措定することが、男性カテゴリーを自明視する作用を持つのではないかということにあった。この点に基づき本稿では、本研究分野において中心的な存在であり続けるConnell理論の批判的検討を行った。Connell理論は、結果的に男性性を「男性たちによる集会的な実践」として捉え、それがジェンダー関係に配置されるプロセスを検討するものではない。そしてそれゆえに、実践としての男性性はその担い手が男性であることに依存し、ジェンダーカテゴリーとしての男性を男性性に先立つものとして措定する。つまりConnellの男性性理論は、男性カテゴリーを自明視したうえで展開されるものであった。

そのため、男性性理論にButlerのパフォーマティヴィティ概念を援用することは、今日においても有効である。パフォーマティヴィティの議論は、ジェンダーが主体内部にあらかじめ存在するものではなく、主体化のプロセスにおいて不完全ながら反復的に引用されるものであることを明らかにした。男性性とは先立って存在するのではなく、男性としての同一化が試みられる際に不完全ながら反復され引用される。そして男性性の反復実践を通じた男性アイデンティティへの同一化は決して完全なものではなく、常に別の再意味付けへと開かれる。男性性理論にパフォーマティヴィティを援用することは、男性・男性性を固定的なものとしてではなく、流動的で達成不可能なものとして議論することをはじめて可能に

するのである。

日本社会を対象としてConnell理論を受容する男性／男性性研究においても、同様の問題が確認された。男性性は男性の特性や男性の在り方とされ、その達成不可能性はほとんど論じられない。しかしながら、ジェンダーのパフォーマティヴな側面に着目する研究もわずかに存在する。本稿では平山（2017）の研究を取り上げ、今後の男性性理論にパフォーマティヴィティを援用するにあたっては、その再意味付けの様相を詳らかにすることが重要であると論じた。

このように本稿の意義は、Connell理論が持つ根本的な課題を明らかにし、Connell理論に依拠し続けることの限界を示した点にある。さらに本稿ではConnell理論を乗り越える方向性として、男性性理論にパフォーマティヴィティ概念を援用して男性性の反復が失敗する様を明らかにすることを提起した。

他方で本稿は理論的考察に留まるものであり、今後の研究では実証的なデータに基づいて具体的な理論枠組みを検証する必要がある。さらにはその作業を通じて、パフォーマティヴィティ概念の有効性と限界を見極めていくことも、残された課題である。

いずれにせよ、今後の男性／男性性研究においてはConnell理論を金字塔とするのではなくそれを批判的に乗り越える作業が必至であるとして、本稿を閉じたい。

## Acknowledgments

本研究はお茶の水女子大学ナガセ研究奨励金、JSPS科研費23KJ0959の助成を受けたものである。また本稿の執筆にあたっては、2名の匿名査読者から貴重なご指摘を賜った。記して感謝申し上げたい。

## References

- Beasley, C. (2012). Problematizing contemporary men/masculinities theorizing: The contribution of Raewyn Connell and conceptual-terminological tensions today. *The British Journal of Sociology*, 63(4), 747-765.
- Beasley, C. (2015). Caution! hazards ahead: Considering the potential gap between feminist thinking and men/masculinities theory and practice. *Journal of Sociology*, 51(3), 566-581.
- Beasley, C. (2023). Embrace or engagement?: Critical studies on men and masculinities and feminist posthumanism/ new materialism. In Mellström, U. & Peace, B. (Eds.), *Posthumanism and the man question: Beyond anthropocentric masculinities* (pp. 139-153). London: Routledge.
- Butler, J. (2018). 『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(竹村和子, Trans.). 東京：青土社. (Original work published 1990).
- Connell, R. W. (2005). *Masculinities* (2nd ed.), Berkeley, and Los Angeles: University of California Press.
- Connell R.W. (2022). 『マスキュリニティーズ：男性性の社会科学』(伊藤高雄, Trans.) 東京：新曜社. (Original work published 2005).
- Connell, R. W. & Messerschmidt, J. W. (2005). Hegemonic masculinity: Rethinking the concept. *Gender and Society*, 19(6), 829-859.
- Howson, R. & Hearn, J. (2020). Hegemony, hegemonic masculinity, and beyond. In Gottzén, L., Mellström, U. & Shefer, T. (Eds.), *Routledge international handbook of masculinity studies* (pp. 41-51). New York: Routledge.
- 平山亮. (2017). 『介護する息子たち：男性性の死角とケアのジェンダー分析』. 東京：勁草書房.
- 平山亮. (2020). 「男性性による抑圧」と「男性性からの解放」で終わらない男性性研究へ』. 『女性学』27, 42-56.
- 川口遼. (2014). 「R.W.Connellの男性性理論の批判的検討：ジェンダー構造の多元性に配慮した男性性のヘゲモニー闘争の分析へ』. 『一橋社会科学』6, 65-78.
- 小口藍子. (2023). 「男性／男性性研究はどこに向かうのか？：研究動向と展望』. 『人間文化創成科学論叢』25, 137-148.
- 渋谷知美. (2001). 「『フェミニスト男性研究』の視点と構想：日本の男性学および男性研究批判を中心に』. 『社会学評論』51(4), 447-463.
- 多賀太. (2001). 『男性のジェンダー形成：〈男らしさ〉の揺らぎのなかで』. 東京：東洋館出版社.
- 田中俊之. (2009). 『男性学の新展開』. 東京：青弓社.

Abstract

## **A Consideration of Men and Masculinity Studies Applying Performativity: From Theory to Prospect**

Aiko OGUCHI

Problematized in this article is the notion that men and masculinity studies (MMS) have conceptualized masculinity as men's practice, identity, or something that determines men's actions, and that this conceptualizing helps to take the category of men for granted. Thus, the theory of masculinities by Raewyn Connell, which has been the most influential in MMS, is critically considered in terms of the above point. Further, in doing so, it is indicated that it is effective to apply the concept of performativity by Judith Butler to theorize masculinity. The concept of performativity reveals that the category of men as a consistent gender never exists in subjects, and it is an unachievable process through incomplete repetition of masculinity. In addition, repetition can always fail, with the possibility of resignification. Performativity shows that men and masculinity are not fixed but fluid, with the possibility of failure. However, in Connell's analysis, masculinity is recognized as men's collective practice. With the notion of masculinity as men's collective practice, she herself positions each masculinity into gender relations based on the dualism of masculinity/femininity. It is further pointed out that masculinity as collective practice always assumes the category of men as bearers of masculinity in advance. Practices are recognized as things already done, and this notion ends up ignoring the fact that performative repetition of masculinity is incomplete and unachievable. It is pointed out here that Connell's theoretical framework multiplies masculinities, but in the end she treats them all as fixed. Therefore, the fixed category of men is always assumed in advance. It is concluded in this article that to overcome this theoretical limitation, it is effective to develop theories of masculinity applying performativity, which enables us to reconsider

men and masculinity as fluid. Finally, focusing on MMS in Japan, this article discusses some prospects of studies applying performativity.

**Keywords:**

men, masculinity, Raewyn Connell, Judith Butler, performativity